

4 月14日、土曜日。琵琶湖の湖上に一艘の観光船が乗り出した。だが、この船はふだん琵琶湖を行き来している観光船とは様子が違う。甲板には黒いスーツに身を固めた男たちが集まり、その中に宮司らしい人物の姿も見える。彼らは春の琵琶湖の光景を楽しみむいとまもなく、慌ただしく甲板を動き回っていた。

この人々は近江の粟津五社のひとつ、石坐神社の宮司と氏子たち。大津市にある日吉大社の山王祭で、今年の「粟津の御供」を担当する当番に当たっているのである。

編集部は「粟津の御供」が行われる「神輿渡御」に同行することができた。「神輿渡御」は山王祭の中でも最終日前日に行われる大きな行事である。日吉大社にある七基の神輿が台船に載せられ、曳航されて琵琶湖を行く。粟津五社のうちその年の当番を務める神社では、前日から「粟津の御供」と呼ばれる

無形のカミへの奉仕に見出すもてなしの本質

る特別のお供えを氏子が総出でこしらえ、湖上で神輿に奉るのである。乗船後、忙しく立ち働いていたのは、船の甲板部分に急遽祭壇を設けられるためだった。そこに用意された「粟津の御供」を並べ、飾り付けをして神輿の到着を待つ。

当日は晴れていたが湖上は強風が吹き、準備も大変であった。だが、船に揚げられた「粟津神社」の幟が風にはためく姿は勇壮で、いかにも全国の日吉神社を従える日吉大社の祭らしい華やかさである。向かい風に逆らって船を進めること約40分。向こう

「粟津の御供」の準備をする石坐神社の氏子たち



から金色にきらめく船がやってきた。正確には台船に載せられた神輿が、陽光を受けてきらめいているのである。

「粟津の御供」は、日本が古来受け継いできた、ある「もてなしの形」の象徴ともいえる神事である。山王祭ではさまざまな神事が行われるが、年に一度山から下りてこられる神々をもてなすために、人々が心を砕いたあかしでもある。

「粟津の御供」に限らず、日本には地域に根付いたさまざまな年中行事があり、その中で多彩なもてなしの形が受け継がれてきた。馴染み深いところでは、年越しから正月にかけて行われる行事が思い浮かぶ。現在東京では大晦日に年越し蕎麦を食べ、除夜の鐘を聞き、元旦には神社へお参りし、雑煮やおせち料理を食べるコースがオーソドックスと思われているだろう。

しかし、本来は大晦日に歳神様をお迎えすることの方が重要だった。一家の主人は神棚を掃除し、新しい幣帛を切って飾り付け、榊やお神酒を供える。ご馳走を食べるのは正月ではなく大晦日である。地域ごとに伝わる伝統的な大晦日のご馳走をまず神棚

おもてなしの源流

第6回

まつり

サービス経済化が進展するなか、競争優位性の源泉として顧客接点の強化を挙げる日本企業は多い。そこで注目されるのが「おもてなしの心」の発揮だ。日本ならではのといわれるものだが、どんな経緯で成立し、どんな要素で構成されているのか、よく知られているとはいえない。この連載では今ももてなしの心が息づく現場を歩くことで、「おもてなし」とは何か、企業の競争優位性構築にどう生かせるのかを明らかにしていく。

文 千葉 望 企画編集 五嶋正風 (本誌)

(ときには仏壇にも)にお供えし、家族全員でお参りをして歳神様をお迎えしたのち、人間たちは同じメニューをいただく(神人共食)。それがメインイベントである。ここで注目されるのは、

- 神はどこか離れたところからやってくる
- 人々はその神を迎え、もてなす

という考え方である。民俗学の巨人・折口信夫は「マレビト」という概念を提唱した。マレビトは客人であるが、彼らは遠いところから人々が住むところにやってくる異人であり、幸をもたらすと共に、ときには(対応を誤ると)災いも持つてきかねない

存在だった。人々はマレビトに一定期間心地よく滞在してもらい、再び送り出さなくてはならない。そのためには「もてなし」が重要になってくる。

日本の祭や年中行事を調べてみると、この「迎え」「もてなし」「送り」の組み合わせがセットになっていることが多い。ハレの日にはご馳走を食べるものだが、それはまず神やマレビトをもてなすためのものだったことを忘れてはならないだろう。

日吉大社の山王祭、特に「粟津の御供」はその「もてなし」を示す格好の事例のひとつである。まつりの中のもてなしは、どのような形態で、どんな目的を持って行われているのか。次ページから検証していこう。



船で運ばれる「粟津の御供」。奥に見えるのが、台船に載せられた日吉大社7基の神輿。



船上で執り行われる「粟津の御供」奉納の神事。



神の生命力を人がいただく

今回、祭のもてなしの案内役を依頼したのは国立歴史民俗博物館の研究者、山田慎也氏である。山田氏は日本の葬祭に関する研究を続けてきた。ワールドワークを通じて、神仏へのもてなしの事例も集めている。

取材した滋賀県大津市の日吉大社は、神仏習合の思想に基づいて比叡山延暦寺を護持してきた神社である。延暦寺と日吉大社の関係は、奈良の東大寺と春日大社とのそれに等しい。日吉大社のお社は延暦寺の門前町・坂本にあり、長い参道の両隣には延暦寺の塔中が立ち並んで落ち着いた光景を形作っている。

現在では八王子山に東西の両本宮のほか、いくつもの社殿が置かれているが、山頂付近には「黄金の大巖」と呼ばれる大きな磐座がある。もともと古神道では山や石そのものが神のおわす磐座だった。今

のお社はその上に建てられたものと思われる。

御祭神は、西本宮が大己貴神(オオナムチノカミ)、東本宮が大山昨神(オオヤマクイノカミ)。大己貴神は奈良・三輪山の神を天智天皇が勧請したものである。なお三宮宮には鴨玉依姫神荒魂(カモタマヨリヒメノカミノアラミタマ)が祭られている。4月12日に行われる「午の神事」では、大山昨神と鴨玉依姫神の婚儀が行われるとされている。

山王祭は3月第1日曜日から始まる。この日、ふだんは神輿庫に収められている神輿を山上まで担ぎ上げる。神輿が上げられた後は、4月12日に行われる「午の神事」まで毎日氏子がお山に登って燈明を献じる。この間、大山昨神と鴨玉依姫神は忌み籠りをなさって、荒魂を浄化する、あるいはお見合いを



桜吹雪の中、稚児と甲冑武者らの行列が美しい花渡り式。

するともいわれる。忌み籠りとは精進潔斎して自らを清らかに保つことをいう。

山王祭は日吉大社の大きな祭であるが、山田氏は先行研究も引きながら、これも本来は日本のあちこちで見られたような、その地を守る自然神の祭だったのではないかという。

「もともと日吉大社の神は地元の神様、山の神様であったものと考えられます。地域を守る男女二神で、それに神話的知識が加わって名前がつけられたのでしよう。山の神様は春になると山から下りてきて、農耕を守ってくれる存在でした。無事に収穫が終ると山に戻っていく。山王祭でもまず神輿を山上に上げますが、祭で大事なものは下りてくることです。下りるためにまず上げておく。儀礼が複雑化してきたものといえます。このとき男女二神が忌み籠られますね。これも本来は、神と人が共に清浄になることが大切で、人間が清浄になることがメインだと思われまます」

農耕を守る自然神だったものが、天智天皇が大津京をつくり、大己貴神を勧請して変貌を遂げた。もともとからいらした神と、あとからこられた神が共存す



やまだ・しんや
国立歴史民俗博物館助教
1997年慶應義塾大学大学院社会学研究科博士課程単位取得退学。博士(社会学)。専門は民俗学。国立民族学博物館講師などを経て、98年から国立歴史民俗博物館に所属。著書論文等は「死をどう位置づけるのか 葬儀祭壇の変化に関する一考察」(国立歴史民俗博物館研究報告)など。





宵宮落し神事。若者たちが1トンもある神輿を前後に揺する。

るうちに、やがて最澄によって比叡山延暦寺が開かれ、神仏習合の大きな神社へと変わっていく。このあたりは、神仏習合思想の発展と共に、日本のあちこちで見られた変貌と相似形であろう。

「午の神事」では、山上に上げられた神輿は若者たちの手によって、闇の坂道を駆け下りていく。45度もある急な階段、カーブをもつかもしれない勇壮な神事によって下ろされた神輿は、東本宮の拝殿に奉安され、神輿の後ろと後ろをつなぐ「尻繋ぎの神事」が行われる。これは大山昨神と鴨玉依姫神の結婚を意味しているといわれる。二柱の男女神の結婚は、やがて出産へとつながっていくが、誰もがこの儀式は五穀豊穡を祈るものだと想像できることだろう。いかにも農耕社会らしい祭なのである。

さて、本題である「もてなし」について考えてみよう。山王祭では4月13日の午後3時から「未の御

供献納祭」が行われるならわしである。この御供は京都の室町仏光寺の日吉神社氏子によって行われる。平安期から長く続く神事である。供えられるのは矢・鏡・筆・人形・造花・菓子など。この御供は二神の結婚によって生まれる御子神に供えられるため、このような内容となったという。子どもが喜びそうなものや、親が子どもに託す願い（矢や筆）が伝わってくる品々である。春の暖かな午後、宵宮場にある四基の神輿に供えられる儀式はのどかで、前夜の「午の神事」とは趣を異にする。こちらは、もともと日吉大社にいらした神への「御供」といえる。すっかり日が落ちてから行われるのは勇壮な「宵宮落し神事」である。参道の石鳥居下付近にあつまつた駕輿丁を務める若者たちは、それぞれ名前を呼ばれ、大声で返答したのち、大松明を先頭に参道をいっせいに駆け上っていく。町ごとに定められた神輿があり、それにとりつくくと神輿を激しく揺さぶり始めるのだ。1トンもある神輿がシーソーになったかのように、大きな音を立てて前後に揺すられ、その音が坂本の町に轟き渡る。

激しい動きは鴨玉依姫神の陣痛を表すといわれている。激しい陣痛も当然で、生まれてくるのは別雷神（ワケイカヅチノミコト）である。神々の交わりと御子神の出産という生命力を謳歌する祭は、日本古来の祭の形を体現していて、実に興味深い。ただ、御子神出産説には異論もある。景山春樹の『神体山』がその代表例で、景山説について山田氏は、

「子どもが生まれてくるのではなく、男女二神が合わさることで生命力が復活するものにとらえています。生命力の象徴として子どもになぞらえるのがわかりやすいでしょう。若宮も、子どもというより新しい力を人格化したものと考えられます」と話す。

毎年男女二神が子どもを生む。それは季節が巡り

おもてなしの源流

「迎え」と共に重要な「送り」

春になってまた農作物が栽培され、収穫されるまでの新しい力を、山の神様がもたらすということなぞらえている。

「天皇が新たな穀物を神に奉げ、自らも食べる新嘗祭の場合は、いちばん力が衰えた時期に行われます。江戸時代までは旧暦の11月、冬至に近い頃。収穫がすべて終わり、新しいものが生まれぬ時期に新しい力を神からいただく。そこが重要です」

4月14日には山王祭の中でも非常に華やかで特徴のある行事、「神輿渡御」が行われる。湖上では最初に紹介した「粟津の御供」がある。この御供を、粟津五社と呼ばれる5つの神社が毎年持ち回りで手作りすることは既に述べた通り。山田氏によれば、「こちらの御供は、三輪山から勧請された新しい神へのもてなし」

と考えられる。今年の当番は石坐神社。13日に行

われた、御供作りの様子を見せてもらった。

御供は実に綺麗で、にぎやかなものだった。氏子たちはそれぞれ担当分けして、御供作りに精を出す。特に神が食される粟飯などを作る人たちは、きちんと和紙でできたマスクを着用する。息やつばなどが神僕にかからないようにするためである。御供作りを手伝う宮司夫人らは神の葉を一枚噛んで、話をするとときに大きく口が開けられないようにしている。粟飯、みかん（これは菓子でみかんをかたどつてある）、米粉で作られた菓子、鯛……。思いのほか多彩なメニューである。粘土でこしらえ、スプレー塗料で銀色に色づけられた御供もある。

「もともと大己貴神は大和の三輪神から勧請されたものでした。粟津との関係でいえばおそらく旧荘園

だったのではないのでしょうか」

作業が終わってみると実に綺麗な御供ができあがっていた。彩りよく、品数も多い。これなら神様も喜ばれそうである。宮司の濱中道雄氏は、「メインディッシュからデザートまで、御供のメニューはよく考えられていますよ」

と教えてくれた。神をもてなすため、人々が心を込めてきたことがわかる。

14日の「神輿渡御」では、この御供は粟津の浜から唐崎神社沖まで船で運ばれた。粟津側の船に神輿の載った台船が横付けされ、そこで神事が行われる。再び船が離れるときには両方の船に乗った人々が一斉に扇子を振り合うのが珍しい。船が離れたとたん、宮司や氏子たちが急いでお供えを湖に投げ入れ始めた。捨てるわけではない。

「禅宗の食事では、お粥の中から教粒を生飯なまめと称して分けてとっておき、あとから鳥に与える習慣があります。餓鬼に分け与えるという意味ですが、『粟津の御供』を湖に投げ入れるのもそれに近い意味があるのではないのでしょうか。神にお供えしてもてなしたものを他の生き物にも分け与えるわけです」

一方日吉大社では、湖上から再び山に還つてきた神輿が神輿庫に収められる。翌15日、神職たちは東本宮に始まって各社を祭礼終了の御礼で巡拝し、主な行事は終了となる。年に一度の非常に大掛かりな祭に、日吉大社の往年の権勢を見る思いだった。

神々の力をいただき、1年の繁栄と五穀豊穡を



例祭には比叡山延暦寺の僧侶も参列する。





宵宮落し神事。若者たちが大松明を先頭に参道を駆け上っていく(上)。4基の神輿がかわるがわる揺すられる(下)。

願う祭。そのために人間はさまざまな神事と御供でお迎えし、もてなし、神様を喜ばせたあと、無事に(ご機嫌よく)帰っていただかねばならない。そうすることで自分たちの繁栄が保証されるからである。祭のあと、関係者が集まって直会(なまひらひ)が行われる。祭にはつきものの直会は、単なる「打ち上げ」ではない。神様に(ご)馳走を召し上がっていただいたように、人間も神様と共に(ご)馳走を食べ、酒を飲む「神人共食」の意味を持っている。それによって神の力を分けていただくのである。神を送り出したのちの、大切な行事である。

に、重要なのは、きちんともてなしでまた帰っていただくことにある。「居座られては困る存在という点では祖先の霊も同じ。お盆に地獄の釜の蓋が開いて出てくる祖霊たちは、迎え火を焚かれ、もてなしを受け、送り火と共に再び帰っていきます」

本来の仏教と祖霊信仰は合致しないはずなのに、日本人の暮らしの中しっかりと根付いたお盆の形は、古来伝えられてきた「神様へのもてなし」に強い影響を受けているといえよう。

日本の神は本来実体がない。大石や山を神格化し、その形があるようでないものを日本人は大切に、もてなし続けてきた。こういう考え方について山田氏は、

「おもてなしでは、もてなされる相手の気持ちをはじめ、無形なものが大切なのだと思います。もてなす対象自体が無形である神へのもてなしは、『おもてなしの本質』を考える上で、非常に大切なものはらんでいるように思えますね」と言う。

サービス業において重要なのは、顧客をおもいやる気持ち、言い換えれば顧客に対する想像力の発揮である。だが、行き過ぎたマニュアル化は、本来想像力に富み、融通無碍であるべきサービスを徹底的に形式知化、パターン化してしまうものだろう。パターン化したとたんに人々は自らの想像力を使うことを忘れ、そのうちに想像力自体がやせ衰えていく。無形の神を喜ばせるため、日本人が尽力してきた「もてなし」とは対極の状況だ。

神をもてなすことは、一見日常(ケ)から離れた「ハレ」の行事のように思われるかもしれない。しかし、もてなしを源流にさかのぼっていけばいくほど、もてなしの本質が、かつて心を込めて行われていた神へのもてなしに通じることを感じる。

おもてなしの源流